

所属・資格 史学科・教授

申請者氏名 山本 孝文

研究課題		東アジア古代国家形成期における相互交流と渡来文化の役割
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>本研究では、長野県の遺跡から出土するいわゆる渡来文化を軸に、中国・韓半島・日本列島の5～8世紀代の考古資料のうち複数の地域に共通して見られる遺構と遺物を選定して分析することにより、古代東アジア諸国の国家形成期において相互交流がどのような機能を果たしたかを明らかにする。研究対象として横穴式石室、帯金具、馬具、そして唐草文・獅噛文をはじめとする文様意匠を扱う。</p> <p>研究の方法としては、長野県を中心に関東・北陸のいわゆる渡来系文化とされる資料を収集してデータベース化し、現地における資料調査や測量調査を行って比較検討の材料を準備する。そのなかで遺構・遺物の構築・製作技術的観点を取り入れた資料の精査と考察を行う。</p>
	研究の結果	<p>上記の研究対象のうち、まず帯金具に関しては長野県岡谷市コウモリ塚古墳出土の従来馬具の飾金具とされていたものを実見調査し、大陸出土品と比較することで、馬具の金具ではなく、もともと渤海の腰帯具が移入され転用されたものであることを明らかにし、古代における渤海と信濃の交流相を明示した。その成果は「渤海の帯金具から見た信濃と大陸の交渉」として『長野県考古学会誌』に投稿した。横穴式石室に関しては長野県の北信・東信・南信の石室の一部と、静岡県石室の観察を行い、両地域の系譜関係を検討した。「韓国における横穴式石室研究の論点と構造・技術系統論」の執筆と併せ、今後各地域の関連性の考察が必要となる。文様意匠のうち、獅噛文に関しては昨年度までの資料調査と合わせて2回にわたって学会・研究会で発表し、鋳造・打ち出しの両者について日韓の技術系譜のつながりを提示することができた。唐草文に関しては中国・朝鮮半島・日本の資料収集を実施しており、継続中である。</p>
	研究の考察・反省	<p>サバティカルの機関を利用し、中国・韓国・日本に加え、ヨーロッパの博物館などで十分な資料収集の時間を取ることができた。その結果をいくつかの学会・研究会で報告し、さらに論文にまとめることができた。特に帯金具に関連する内容は各地の資料が揃いつつあるため、複数の学術論文の執筆を通じて体系的な研究にまとめることができると考える。横穴式石室に関しては、測量などの手間のかかる作業があるため、今後引き続き作業を進める必要がある。唐草文の資料は膨大であるため、当初見込んでいたより資料収集が進まなかった。このテーマも継続的な集成作業が必要である。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>〔研究発表〕 第90回文化財と技術の研究会「日韓の古墳出土品に見る打ち出し技法の一例」(2018.4.14) 東京・工芸文化研究所 日本考古学協会第84回総会「日韓の獅噛文帯金具の一類型に見る技術系譜」(2018.5.27) 東京・明治大学 國學院大學研究開発推進機構第44回日本文化を知る講座「朝鮮半島の国家形成と文房具―日本・中国との関係から―」(2018.6.2) 東京・國學院大學</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>Eighth Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, Diversity of Stoneware Production and Distribution during Three Kingdoms Period on the Korean Peninsula, 2018.6.10, Nanjing China 明治大学日本古代学研究所国際シンポジウム「ユーラシアの中継長距離交易と朝鮮三国」(2019.2.23) 東京・明治大学</p> <p>〔研究成果物〕 「韓国における横穴式石室研究の論点と構造・技術系統論」『横穴式石室の研究』同成社(刊行予定) 「横穴式石室の築造技法からみた百済と湖南地方」『国立歴史民俗博物館研究報告』(投稿中) 「渤海の帯金具から見た信濃と大陸の交渉」『長野県考古学会誌』(投稿中)</p>	